

心の散歩道

『思いやりこれ佛心』

毎日の繰り返しと連続の生活の中で、同じ家族と暮らしていれば、長い間にはいろいろな日があります。「一軒の中に一人悪者がいれば、その家は無事だ」という言葉がありますが、いくら家族が、親子兄弟の中でも、お互いに個人個人の人格を持っており、もしその尊厳が傷つけられれば必ず反目が起こります。

そこで、いつの場合でも素直に「私が悪かった。間違っていた」と言える者がいれば平穏です。しかし、それは容易に出る言葉では

ありません。それは私たちお互いにみんな「我」をもっているからです。

「我」の字は、よく見ればその中に「戈(ほこ)」という字を持っています。自分を守る為に武器の戈を内蔵しているのです。従って、「我」を張れば、必ず「他」も強くなって、「我他彼此(がたびし)」となるのです。そこで、自分の中の「戈」を納めると同時に、相手の立場に立って物事を考える心、つまり、『思いやりの心』がなければなりません。思いやりも一字で表現すれば「如」の下に「心」を書き、「恕(ゆるす)」とも言います。「他人の心の如くにする」ことであります。

多忙な現代、若い人たちはそれぞれ外へ出て働いています。家で留守をしているのは大体が老人という例が多いようです。しかも孫の守もしなければならいとなれば、留守役も大変です。毎日のこととて、つい愚痴の一つでも言いたくなって、「私らがこうして家で留守しているからこそ、あなたたちは出ていけるのや」と言うと、「私たちが出て働いているからこそ、家(うち)がやっていけるのや」と必ず返ってきます。

そこで大事なことは、こその二文字の付け所なのです。「あなたたちが出て働いてくれればこそ、私らはこうしておれる」と相手の方に付けると、僅か二文字ながら全く様子が変わり、先方もまた、こちらを立ててくれることになるのです。「この世の中はこその二文字の付け所、治まるもこそ、乱るもこそ」と申します。

ここに思いやりの心が生まれてくるのです。

このところのニュースは考えも付かない凶悪且つ冷淡非道な事件が毎日のように報道されています。その一つ一つが、現在の病める日本社会を浮き彫りにしているように思われるのです。物は豊富になり、金さえ有れば何でも出来る。金と福祉があれば老後は安心だ、と思いつく日本人。先進国は物の豊かさより、自然と共存して、生活の豊かさ、心の豊かさを味わっているように思っています。相手の立場に立って考えると言うことは、人間対人間だけにとどまらず、私たちは地球の上に住まわせていただいているのだと思う事こそ、子供に対する教育ではないでしょうか。

お大師様は『法界無縁の一切衆生を觀すること、猶なおし己身こしんの如ごとし。然る所以ゆえんは、善人ようじんの用人ようじんは他を先に己を後とすればなり』

と、説かれています。つまり、この世に存在するすべてのもの、人々を見ることは、ちょうど自分自身を見るようなもので、自分自身より他のことを先に考える人が、立派な人と言えるからであると述べられているのです。現在の日本は全く逆に、自分の損得利益を優先して考えるのが出世の早道になるような社会に、ますます変わっていけば、弱肉強食、優勝劣敗の動物の世界と変わらないことになり、殺伐とした心の病める社会が広まります。

お盆、お孫さんと一緒に、ご先祖様に手を合わし、今の自分はご先祖様が居られたからこそであり、今生きて居れることの有り難さを喜び、その心を供えたいものです。

